

## 編集後記

『企業家研究』第21号は、論説2本のほかに、「2022年度年次大会共通論題」3論稿、「書評」6本、「FES便り」、「私の企業家研究」という、企業家研究の裾野の広がりを感じさせるラインナップとなっております。

論説の1本目は、「NPOの事業承継における創設者シンドローム」(横山恵子・小室達章・山本義郎)です。本論文は、創設者の特性や行動様式が組織に対する逆機能として働く「創設者シンドローム」に着目し、その概念が日本のNPOの事業承継にも適用できるか否かについて、定量的に検証を試みております。

また論説の2本目は、「大学生の企業家的志向性と就職活動の結果—教育と家庭環境に注目して—」(佐藤憲・梅崎修)となります。本論文では、学生の企業家的志向性がどのように形成され、就職活動の結果にどのような影響を与えるかを、起業家教育と家庭環境に注目して分析しております。

第21号では、これら2本の論説を彩るように、企業家研究に関連した内容の多面的な記事を掲載しております。「2022年度年次大会共通論題」では、経済学、経営学、経営史の観点から企業家研究の現状に鋭く切り込む、年次大会のエッセンスがまとめられております。また、「書評」で紹介された6冊の書籍の内訳は、経営史3冊、経営学2冊、研究方法1冊と多岐にわたっております。さらに「FES便り」では、2022年6月・11月開催の「講座・企業家学」について、紹介がなされております。最後に、「私の企業家研究」では、金井一頼先生の研究の軌跡を若い頃のエピソードも交え、ざっくばらんに語って頂いております。

ここまで第21号の内容について紹介しましたが、充実した紙面の背景には、多くの皆様の多大なご尽力があります。結果に拘わらず、本誌へ投稿された皆様、査読を快く引き受けて下さった匿名レフェリーの皆様に、この場を借りて、お礼申し上げます。また、編集委員会や事務局からの要請により、「2022年度年次大会共通論

題」、「書評」、「FES便り」、「私の企業家研究」などの関連記事を執筆して頂いた先生方にも、併せてお礼を申し上げたいと思います。

最後に、編集委員会副委員長就任後の1年を振り返り、「変わりつつあるもの」と「変わらないもの」のコントラストを感じました。

「変わりつつあるもの」としては、投稿される論文が、高度化・学際化している傾向が挙げられます。具体的には、新たな研究方法を用いた論文のほか、経済学、経営学、経営史といった従来の企業家研究の学問領域を超え、自然科学との融合を目指す挑戦的な論文も、見られつつあります。こうした傾向は企業家研究に進歩をもたらす反面、それらを査読付論文として掲載するには、新たな仕組みが必要となります。この企業家研究の進歩について、投稿者の状況をも考慮しつつ、副委員長の1人として対応していければと考えます。

一方で「変わらないもの」としては、対話を通じて、査読付論文が形づくられるプロセスが挙げられます。投稿者は論文投稿後、編集委員会の審査結果を受け、必要に応じて改訂が求められます。このやり取りでは、査読付論文に仕上げるために、投稿者と編集委員との間で書面を通じた議論が行われます。本誌の場合、最初の審査結果の通知後1年以内であれば、同一の審査体制での継続審査が可能となります。これにより投稿者は、短期間での改訂に追われることなく、論文内容をじっくり再検討できますので、時間的優位を活用し、良い論文に仕上げ頂ければと存じます。

ここまで1年間の雑感を書かせて頂きましたが、学会員の皆様の最先端のご研究が論文として投稿され、査読付論文として掲載されるプロセスに関わることができることは、編集委員にとって大きな喜びの1つです。皆様のご投稿を、心よりお待ちしております。

(新藤 晴臣)